

# 調査項目の多面的な活用

守口市立八雲小学校 重松 昭生

## はじめに

今回の「学力向上のための基本調査」で本校は、「生きる力」では「自分の住んでいる地域の活動や行事に進んで参加している」の項目（「社会的実践力」の領域の「社会参加」の項目）が高水準であった。本校の進めてきた「地域を積極的に活用した総合的な学習」等の成果であり、学校の活動に応え協力を惜しまない地域の教育力の表われであると思う。祭りや子ども会など、この項目に具体的に回答できるだけの「受け皿」が豊富なこと、そしてなにより地域の集まりで「この高水準」が誇らしげに話題にされる学校と地域の関係が、高水準の要因であろう。「学びの基礎力」では、「演劇・音楽・バレエなどの舞台を実際に見る」（文化体験）と「インターネットを使って何かを調べる」（メディア体験）の値が高かった。前者は近隣施設での鑑賞の機会や交通の便のよさによるものだろうが、地域の集まりでは現状で十分とするのではなく「もっと連れて行きたい」という声があった。「いいことはもっと伸ばそう」という力がこの地域にはある。後者は、情報教育のプロジェクト校として、いち早くインターネット環境が整ったことや家庭での急速な普及もあって、高学年の児童にとっては「あたりまえ」の情報ツールとなっている実情が見て取れる。

さて、このような調査を実施すると「教科学力」のデータが注目され、一人歩きしがちである。結果としてのデータが、評価として指導に生かされなければならないし、具体的な方略につながってこそ意味があると考えている。「生きる力」や「学びの基礎力」に「教科学力」を含むバランスよい「21世紀型学力」を育む方略を見出ししていきたいのである。

大阪教育大学の田中博之助教授は、「指導と評価の一体化」を超えた「学びと評価の一体化」を提唱している。その具現化の第一歩は、調査データから得られた知見を、個々の児童の課題として保護者に説明することで「一体化」をはかることであった。筆者はこれを、「新しい学力を育むための教育調査」の報告書『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』（田中博之監修/ベネッセ文教総研編）で、第4章-5「ふりかえる活動が子どもを学びの主人公にする」（p.133 - 140）に記すことができた。

そこで今回は、「生きる力」や「学びの基礎力」の「調査項目」そのものに着目し、「学びと評価の一体化」のための具体的な活用を、本校での実践を踏まえて、提案していきたい。

## I 「生きる力」育成に生かす

「学習についてのアンケートA」問4・問5の30項目は、「総合的な学習の時間」などで育てたい「生きる力」である。「問題解決力」「社会的実践力」「豊かな心」「自己成長力」の4つの領域より構成され、例えば「問題解決力」の領域は、調査研究力やコミュニケーション力、情報活用

力が問われている。これらの項目に子どもが4段階「とても・まあ・あまり・まったく」の自己評価をすることで、子どもの自己評価力を含む「生きる力」を育てていくことにもなる。

従前、学習の終わりにふりかえり活動「評価セッション」を行い「この学習を通じてこんな力

が「ついた」としていても、評価項目を事前に提示することはしなかった。内容的な目標を明示して学習活動に入ることであっても、「この力を育てるためにこの学習をする」とはしなかったのである。「学びと評価の一体化」のためには、はじめの学習計画段階で、この主体的な「めあて」が必要ということになる。

そこで、総合的な学習のはじめに図表 5 -

3 - 1 に示す「めあてを探そう」の 50 項目を子どもたちに提示した。ただし、この 50 項目は、今回の「学力向上のための基本調査」における「生きる力」の項目が調査票のボリュームの制約から前回の「新しい学力を育むための教育調査」の「生きる力」の項目よりも絞られているため、前回の調査項目をベースにしている。

■図表 5 - 3 - 1 学習計画段階で子どもに示す「めあてを探そう」

この中から自分のめあてを探そう！！			
年 組 番 ( )			
学習の進め方について	目標を立てる	1. 身の回りのことや自分が体験したことからもっと調べてみたいことを見つけてことができる	27. 友達ひとりひとりのよいところを探そうとしている
	情報を集める／調べる	2. 身の回りのことや自分が体験したことから疑問を見つけてことができる	28. いつも人のために役立つことをするようにしている
		3. 調べてみたいことについて見通しのある活動の計画を立てることができる	29. いつも新しいアイデアを考えている
		4. 「たぶんこうだろう」という仮説を立てることができる	30. やらなければならないことは最後までやりぬこうとしている
		5. インタビューやアンケートをして情報を集めることができる	31. がんばって学習に取り組んでいる
		6. 初めて会った人ともきちんと話することができる	32. 最近の社会のできごとをよく知っている
		7. 意見のちがう人とも協力することができる	33. 外国の文化や人々のくらしについてよく知っている
		8. まわりの人の意見を冷静に聞くことができる	34. 水や空気、ゴミ、エネルギーなどの環境問題について知っている
		9. さまざまな角度からものごとを考えることができる	35. コンピュータ社会の問題点を知っている
		10. インターネットなどで目的に合った情報を集めることができる	36. 点字や手話、車いすかひきなど、しょうがいを持つ人を手助けする方法を知っている
		11. インターネットで調べたことが正しいかどうかをほかの資料で確かめたことがある	37. 健康を守るためにどうしなければならないかを知っている
	12. 電子メールなどで遠くに住んでいる人とやり取りをすることができる	38. 自分が住んでいる地域の自然やくらし、歴史などのとくちょうを知っている	
	13. コンピュータやビデオ、本、カメラ、それぞれの良さを生かして情報を集めることができる	39. 最近の社会のできごとについて家族や友達と話し合ったことがある	
	14. 調べたことをまとめることができる (文章／グラフ／絵など)	40. 環境のことを考えてものをむだづかいせずに使っている	
	15. 調べたことをコンピュータを使ってまとめることができる	41. 自ら進んでお年よりやしょうがいを持つ人に手をさしのべたことがある	
	16. 仮説と結果を照らし合わせて考えることができる	42. 健康を守るために具体的にしていることがある	
	17. すじ道を立ててものごとを考えることができる	43. 自分が住んでいる地域の活動や行事に進んで参加している	
	18. 色分けをするなど分かりやすくまとめる工夫をすることができる	44. 学校や社会のルールを守っている	
	19. コンピュータやビデオ、本、カメラ、それぞれの良さを生かしてまとめることができる	45. 自分にできることや向いていることが何だか知っている	
	20. 工夫して発表することができる	46. 自分がまわりの人から認められていると思う	
	21. 自分の考えや意見を相手に分かりやすく伝えることができる	47. 将来つきたい仕事や夢を持っている	
	22. コンピュータやビデオ、本、カメラ、それぞれの良さを生かして使い分けすることができる	48. 将来つきたい仕事や夢をかなえるために具体的な努力をしている	
	23. 調べたことをもとに自分の考えをもつことができる	49. 自分のことが好きである	
	24. 自分の苦手なことにチャレンジしようとしている	50. 自分の長所と短所を知っている	
	25. 困難や失敗を次に生かそうとしている		
	26. 友達のよいところを参考にしようとしている		

これは、調査項目を参考に本校の子どもたちが「どんな活動をしてどんな力を育むか」が分かりやすいように、「問題解決力」領域を学習の具体的な活動と並べて 26 項目にして、「社会的実践力」「豊かな心」「自己成長力」の 24 項目を加え再構成したものである。

さらに、行動目標ともいえる「問題解決力」領域 26 項目については、文章表現の苦手な子どもや項目の具体性を見出せない子どものために「判断基準」を用意した〔図表 5 - 3 - 2 (協力: 当時大阪市立大学大学院 林 美里さん)〕。

■図表 5-3-2 「問題解決力」領域の 26 項目の判断基準

項目	1	2	3	4	5
1.身の回りのことや自分が体験したことからもっと調べてみたいことを見つけることができる	調べてみたいことが見つけれず、テーマを最後まで決められなかった。	先生のアドバイスをもとにして調べてみたいことを見つけ、テーマを決められた。	自分で、調べてみたいことを見つけ、テーマを決められた。	自分で、調べてみたいことを見つけ、テーマをくわしく決められた。	自分で、テーマをくわしく決めることができ、それについて調べてみたいことをたくさん見つけた。
2.身の回りのことや自分が体験したことから疑問を見つけることができる	疑問が見つからなかった。	先生から言われた疑問を、そのまま調べた。	疑問が1つ見付き、それについて調べた。	疑問が2つ以上見付き、それについて調べた。	疑問が2つ以上見付き、それについて調べていくうちに次々と疑問が見つかった。
3.調べてみたいことについて見通しのある活動の計画を立てることができる	計画を立てることができなかった。	「テーマを考える」「調べる」「まとめる」「発表する」というかんたんな計画を立てたが、立てっぱなしでまったくその通りにいかなかった。	「テーマを考える」「調べる」「まとめる」「発表する」というかんたんな計画を立て、だいたいその通りにいった。	「図書館に行く」「家族にアンケートをする」などのくわしい計画を立てたが、立てっぱなしでまったくその通りにいかなかった。	くわしい計画を立て、その計画を修正しながら進めていった。
9.さまざまな角度からものごとを考えることができる	1つの角度からでしかものごとを考えなかった。		自分の見方とちがう角度からの見方に気づいた。		見方によって、ものごとはまったくちがうように見えてしまうことに気づいた。
10.インターネットなどで目的に合った情報を集めることができる	インターネットを使うことができなかった。	調べてみたが、たかさんのサイトがヒットしすぎて目的に合った情報を見つけられなかった。	調べる単語をいくつか考えて試してみたが、目的に合った情報を探すことができなかった。	スペースキーと調べる単語をうまく使い、目的に合った情報を探すことができた。	見つけた情報をじっくり読んで、いる情報かいない情報なのか決めることができた。
11.インターネットで調べたことが正しいかどうかをほかの資料でたしかめたことがある	インターネットでの情報を他の資料でたしかめなかった。	たしかめようとしたが、他の資料がなかった。	他の資料を見つけることができた。	他の資料とインターネットでの情報をよく読み、比べてみることができた。	本とインターネットでの情報のあつかい方のちがいを知ることができた。
12.電子メールなどで遠くに住んでいる人とやり取りをすることができる	遠くに住んでいる人とやり取りをすることができなかった。	相手は見つかったが、うまくやり取りをできなかった。	やりとりをして、意見をこうかんすることができた。	やりとりを一度して、知りたかった情報を集めることができた。	やりとりを何度かして、新しいことが分かったり考えが変わったりした。
13.コンピュータやビデオ、本、カメラ、それぞれの良さを生かして情報を集めることができる	コンピュータやビデオ、本、カメラ、それぞれの良さは何かを知らない。	それぞれの良さは知らないが、2つ以上組み合わせさせて情報を集めた。	それぞれの良さは知っているが、どれか1つにかたよって情報を集めた。	それぞれの良さを知って、2つ組み合わせさせて情報を集めた。	それぞれの良さを知って、3つ以上組み合わせさせて情報を集めた。
14.調べたことをまとめることができる (文章/グラフ/絵など)	調べたことをそのまま写した。	調べたことのうち、どれを使ってどれを使わないかを考えた。	文章でまとめることができた。	文章や絵やグラフを組み合わせてまとめることができた。	文章や絵やグラフ以外に、分かりやすくする工夫ができた。
20.工夫して発表することができる	工夫をする努力をまったくしなかった。	工夫をしようとしたが、どうしていいか分からず工夫できなかった。	見る人の立場にたって発表しようとし、工夫を1つ取り入れた。	見る人の立場にたって発表しようとし、工夫を2つ取り入れた。	見る人の立場にたって発表しようとし、工夫を3つ以上取り入れた。
21.自分の考えや意見を相手に分かりやすく伝えることができる	相手のことをまったく考えないで発表した。	相手のことを考えたが、分かりやすくする工夫をしなかった。	相手のことを考えて、分かりやすいような工夫を1つ取り入れた。	相手のことを考えて、分かりやすいような工夫を2つ取り入れた。	相手のことを考えて、分かりやすいような工夫を3つ以上取り入れた。
26.友達の良いところを参考にしようとしている	友達の良いところにまったく気づかなかった。		友達の良いところに気づくことができた。		友達の良いところを、自分にも取り入れようとした。

これにより、「この項目(規準)のこの段階(基準)」をめあてに学習を進めるスタイルを、課題設定・計画・調査研究・まとめ表現・伝える交流の場面で行うことができた。子どもたちのより成長したいという意識が、「次のめあて」

を具体的に見出していった。児童がシートに記した「～の活動では何番の項目のどの段階」は、自己評価そのものだし、「最もがんばった活動」の○印は、成果の自己アピールになった。

## Ⅱ 評価セッションに生かす

「次の行動、次のめあて」「自分の成長課題」を主体的にかつ具体的に明らかにすることで、「中間セッション」で計画の変更や修正が行われたり、最終の評価セッションでは具体的にどの段階までの活動ができ、子ども自身が図表5-3-1の27以降の項目で「こんな力がついた」と評価できるようになった。ここに自己評価力の成長が見て取れる。

このように「自分で決めためあて」とそれに対する自己評価を「評価セッション」で捉えておけば個人懇談会での保護者への「総合学習の評価」は、実に具体的に行うことができる。「なぜよかったのか」の説明に説得力を持たせることができる。評価項目を最初から示すことが、子どもや保護者の信頼、ひいては「学びと評価の一体化」に大切なことが分かった。

## Ⅲ 通知表に生かす

図表5-3-2を使った評価セッションでは、次のような場面が見られた。クラスのある児童A君の最終の「評価シート」(最終の評価セッション後記入)を見ると、テーマ設定項目1「身の回りのことから調べてみたいことを見つける」の自己評価は、4の「自分で、調べてみたいことを見つけ、テーマをくわしく決められた」となっている。同様に調べる段階では、項目10で4の「スペースキーと調べる単語をうまく使い、目的に合った情報を探すことができた」、まとめでは項目14の5「文章や絵やグラフ以外に分かりやすくする工夫ができた」としている。最もがんばった印をつけた発表の段階は、項目21の4「相手のことを考えて、分かりやすいような工夫を2つ取り入れた」である。

しかし、パネルセッションにした彼のグループの「プレゼン評価シート」(発表の後聞く側に

なったものが各グループ宛に書く)では必ずしも「分かりやすい発表」ではなかったということが分かった。A君は、特にがんばったと印をつけているが、この項目については「申告どおりの評価はできない」ということになる。グラフの書き方についてアドバイスを加えることで、まとめ方と発表の仕方は来学期への課題とした。通知表「活動」の欄は、「自分で、調べてみたいことを見つけ、テーマをくわしく決められた。文章を分かりやすくする以外に、グラフや写真などを入れてまとめた。せっかく書いたグラフだったが見る人には分かりにくかったようだ。今度は言いたいことが伝えられるグラフを書いてみよう」とした。これで、一学期の学習成果と今後の課題が子どもとの共通理解の基で「学びと評価の一体化」を具現化したことにならないだろうか。

## IV 保護者懇談会で生かす

今回の調査項目で着目したいのは、「学びの基礎力」である。学力向上を実践してきた教師が「手の内を見せた」とも言えるここでの項目は、保護者の願いに応えるものである。また、「家庭での指導・活動」の項目(第2章図表2-5-1参照)は、「家庭でできる学びの基礎力育成ポイント」と言える。「生きる力」と「学びの基礎力」が、教科学力と絡まることで、「21世紀型学力」の説得力はより強くなった。

また、「学校での指導・活動」として問われる項目(第2章図表2-5-2参照)は、「先生の通知表」ともいえる。項目を自分のクラスのデータで読んでいくと、日ごろから何を強調し身につけさせようとしてきたかが見えてくる。それは「宿題をきちんとやる」や「テストの間違いなおし」であったりもするが、「バランスよく」という観点にたてば、教師の授業改善のための指針になる。

一方、このデータを子ども一人ひとりについ

て読んでいくと、担任の指導をどの程度受け入れ大切に思っているかが分かる。これはクラス全体の傾向との比較で、保護者に実態を説明する項目として使える。さらに、「家庭での指導・活動」の項目をあわせて読んでいくと、一人ひとりの子どもの「処方箋」が提案できる。担任と保護者が共有できる「処方箋」である。

保護者との個人懇談会でも、「ここができてないです」とネガティブに伝えるのではなく、「この基礎力をこの方略で伸ばしましょう」と個々の子どもの具体的な処方箋を提案していった。

一方、「『こつこつ』の指導は家庭でもできたが、『考え方』の指導はできない」という指摘を受けた。夏休みの宿題などは、「くりかえし」を減らし、「考え方」の課題を増やしたが、結局処方箋のいくつかは「補習」的な機会を休み中に設けざるを得ない状況になった。処方として一般化をめざすには、教師の「リスク」が大きすぎる場合もあるかもしれない。

## V PTA活動に生かす

図表2-5-1「家庭における指導・活動」の31項目は、「学びの基礎力」育成のいわば家庭版になる。教師版同様、これがすべてではないし、個々の家庭によって大切にしている事が違うことも当たり前である。個々のデータを取り上げて「家庭の教育力」とするのは、軽率であろう。

しかし、集計したデータは地域や校区の傾向をある程度見て取れる。このデータを基に地域や校区の子どもたちの実態に対して、具体的に支援するためのPTA活動を提案できるとすれば、この上ない具体的な項目である。

例えば、「図書館に行って本を読むことが、全国的なデータより低い傾向」であれば、子どもたちが安全に図書館に行けるようPTAの活動

として、「火曜日の放課後は交代で図書館に連れて行く地区活動」が実現すれば素晴らしいことだ。「家のお手伝いをよくしている傾向」が読めれば、PTA新聞などでアピールし、より啓発する活動につなげていく。

本校のPTAは実際にこの活動を始めた。全校児童に35項目の調査を二学期早々実施した。「図書館に行く」の項目は、校区に隣接する二つの図書館の名称にするなど、より具体的な項目にした。学校も担任が説明を加えながらアンケートをとる形で協力した。調査結果に基づく実際の活動はこれからだが、「学びの基礎力」育成のためという目標が明白であり、子どもたちを支援する具体的な活動として評価されるにちがいない。

## Ⅵ 習熟度別編成に生かす

少人数加配を加えた「習熟度別学習」が盛んである。算数で行われていることが多く、ペーパーテストで「習熟度」を測り、小グループを編成する。そして、それなりの「習熟度」にあった授業が展開されている。勿論少人数での指導は、通常の学級編成よりは一人ひとりに応じた対応

が可能で、有効な成果の報告がなされている。

しかし、この「習熟度」による小グループの編成を行う際、単に教科学力の「できる子とできない子」を分けるのではなく、「学びの基礎力」も考慮してクラス編成を行ったほうが、よりきめ細かい指導が可能となるのではないだろうか。

■図表 5-3-3 「学習定着の方略」のパターンと「教科学力」との関係(小5)

学習定着の方略のパターン	新しく習ったことは、何度もくり返し練習している(問8④)。	授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方もいっしょに理解している(問8⑩)。	件数	%	基本問題平均通過率		応用問題平均通過率	
					国語	算数	国語	算数
A	○	○	558	32.8	94.0 89.4	69.5 61.4		
B	○	×	240	14.1	90.3 84.3	61.5 50.3		
C	×	○	337	19.8	93.8 88.9	71.1 59.8		
D	×	×	566	33.3	88.6 83.2	63.1 47.3		

○は「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的な回答した場合、×は「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と否定的な回答した場合を示す。Aパターンは、いずれの項目も肯定的に回答している子ども、Dパターンは、いずれの項目にも否定的に回答している子どもを示す。(「学力向上のための基本調査」のデータから作成)

図表 5-3-3 は、「学びの基礎力」の項目で示される「学習定着の方略」のパターンと「教科学力」との関係を示すものである。「学習定着の方略」として、「新しく習ったことは何度も繰り返して練習している(反復方略)」という項目と「授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解している(体制化方略)」という2つの項目の回答パターンと教科学力調査の結果とをクロスして見たものである。後者は、基礎問題の通過率と応用・発展問題の通過率と別々に分けて示している。この図表からわかるように、この2つの学習定着の方略に対していずれも否定的に回答してい

るDパターンの子どもの「教科学力」が最も低いという傾向があることは、国語、算数の全体を通して言えることである(ただし、国語の応用・発展問題では反復のみのBパターンが最も低い)、かといって反対にいずれも肯定しているAパターンの子どもの最も高いとは必ずしも言えず、反復よりも理解や考え方重視のCパターンの子どもの拮抗していることがわかる。このデータは、それぞれの子どもの方略パターンに応じた指導の必要性を示唆するものではないだろうか。理由や考え方の理解重視のタイプの子どもの一律に「くりかえし」を強いることは望ましいことではないだろう。ある子どもには反復

学習で自信をつけ理由や考え方をつかむ指導を絡ませていく指導が、また「くりかえし」を肯定しない子どもには「くりかえし」を無理強いすることなく、理由や考え方の理解を重視する方略を徹底指導することが、「分ける」意味を持つ

ではないかと思えるのである。

有効な小グループ編成は、教科学力のペーパーテストのみに基づくのではなく、本調査の「学習定着方略」のタイプも考慮した編成が、より有効ではないだろうか。

## おわりに — 「調査項目」と子どもたち

40人弱の子どもを一人の担任が1年か2年間、学級という壁の内ですべて育てるという教育の形は過去のものとなりつつある。チームティーチング等の授業改善に限らず、学校外の人材活用や、学年の「持ち上がり」の廃止など、様変わりは多様である。だからこそ、子どもたちに豊かな学力を確かにつけるための教育の在り方を改めて問い直してみることが大切になるだろう。

「学びと評価の一体化」の具現化、子ども一人ひとりの学びの処方箋を出せる教育を具現化することが、子どもたちへの本当の「援助・指導」であり、保護者への「責任」であり、教育実務者の「社会的責任」であると考えます。

この調査の「項目」は、そのための具体的な指針、子どもたちへのプレゼントでありたいと願っている。